

---

# TVスター屋さん

倅

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

TVスター屋さん

### 【Nコード】

N9920B

### 【作者名】

倅

### 【あらすじ】

聖、葉瑠、久美の3ピースバンド、PRISONMANSION。オーディションがきっかけで組んだ個性的な彼らのバンド生活は、まだまだ先が見えていなかった

## 誕生 前編 (前書き)

久しぶりの連載は初めての芸能界ものです。私自身芸能界の詳しい事情はわかりませんがその辺はファンタジーとなるのかもしれない。

コメディータッチでやっていこうと思いますのでお付き合いいただけると思います。

芸能界もの苦手な方は読むのはご遠慮ください。

## 誕生 前編

右肩にケースにしまったギターをかけ左手には未来をかけた歌を綴った楽譜。目の前に立ちただかる建物の一室に俺、藤村聖ふじむらうさつきの明日を左右するオーディション会場がある。

オーディション参加者に割り振られた控え室には、たくさんの人であふれていた。大手レーコード会社G主催のこのオーディションは今回は本格的なバンドグループを作る事を目的としていて、アマチュア出身のバンドマン達や俺みたいにギターを片手に一人で来てる奴もいる。オーディションを目前にそれぞれ最後のチューニングに入り、あるグループは軽い音合わせをしていた。

「  
」

当然歌を歌ってる奴もいる。

「俺もうかつかしてらんないな……」

ケースからギターを取り出しチューニングを済ませると、軽くストロークしてみる。

俺のギターは今日もいい音を奏でるけどここだけの話、俺はギターは上手くないと思っていた。

自惚れかもしれないけど、歌には多少自信がある。だけどどうもギターは並かそのちょっと下というか、心に響いてこない。

でも相棒もない俺は自分の力でやるしかなかった。

しばらく最後の確認をしていると、ある音が耳に入った。耳をすまして聞いているとそいつも俺と同じく一人でギターを片手にやってきた奴だとわかったが…

「…歌、へつたくそだな」

お世辞にも歌は上手くなかった。というか周りの歌につられて、自分の音が取れていない。

するとそいつは歌うのを諦めたのか、今度はギターのみ演奏をしていた。

正直、耳を疑った。さっきは上手いと言えなかった演奏が、ギターだけになった途端にプロに近い演奏になっている。

「誰かわかんないけど、このギターとだったら夢も叶うかもしれない…」

周りにはまだ色んなバンドがいる中で、俺はその音に聞き魅っていた。

…

出番も無事に終わり、まだ出番を待ってる奴がいる控え室でペットボトルの温いお茶を一口飲みひと息をつく。自分の中ではなかなかの演奏が出来たと思う。他の奴等とはというと、俺と同じように満足した表情の奴もいれば、悔しそうに拳を握り締めうつ向いてる奴もいる。

でも俺以外の奴はライブルであって、冷たいようだけど最高の演奏が出来なかったらそれまでという事だ。

なんて偉そうなこといえる立場じゃないけどな。

オーディション最終組らしき奴らが終わりしばらくして、控え室にスーツを着た人が入ってきた。遂に結果発表なのだろうか、周りはいしんとする。

「ああ、ごめんねちょっと呼び出しに来ただけなんだ」

結果発表ではないとわかると室内が一斉に安堵したのがわかる。

「えつと56番の藤村さんと65番の松谷くん、ちょっとこっちに来てくれるかな？」

俺？なんかしたっけ？ここの建物に来てからというもの、いつもの俺からは考えられない程いい子にしてみたと思うんだけど…。首をかしげながらスーツの人についていった。

…

俺の前を歩く“65番松谷くん”には正直驚いた。驚いたというか、なんというか…。だってこの人男の俺からみても超男前。すらっとした手足に高い身長、整った顔立ちにちょっと洒落た髪型。

「あんたモデルやった方がいいよーっ」

っていつてしまいそうなくらい。ちなみに俺はというと、身長そこそこ顔立ちもそこそこ、唯一の自慢は目元のみ。男前には敵いません。

「なあなあ、なんでわしらが呼ばれたんだと思う？」

さあ、なんでじゃろうね…、俺にも覚えはないっす。

「わしと君、今日初めてあったよね？」

うん、間違いないべ。俺の知り合いには“わし”っていう奴おらん…

「わっ…わし!？」

気がついたら男前松谷くんが俺の方を向いてた。きよとんとした表情もまた素敵ね…なんて見とれてる場合ではない。

「?わしの話聞いてた？」

あゝ、男前なのに自分の事わしっていうんだ…。しかも声と見た目のギャップが…。心で答えてた俺も、思わず変な方言が混ざってしまっただけではないですか。

「聞いてましたよ。俺もまったく覚えがないです」

「だよね〜。わしもさっぱり」

あつ、この人笑うとまた印象が違う。って俺は恋する女の子かよっ。

…

「失礼します、お二人を連れてきました」

スーツの人に連れられて別室にやって来た俺と男前。スーツの人にならって失礼しますと頭を下げ部屋に入ると、正面にはさつきオーデイション会場にいた審査員の方々、向かって右側には窓枠にもた

れて腕を組うつつ向いているお兄さん。  
男前となんだろ？と顔を見合わせる。

「ああ、志水くんご苦労様」

「いえ、藤村聖ちゃんと松谷葉瑠くんです」

ほう、男前は松谷葉瑠まついたにはると言つらしい。横に立つた男前は、やっぱり背が高い。

「藤村くん、松谷くんオーディションお疲れ様。とりあえずそこに座ってくれ」

俺達は言われた通り正面の椅子に座る。ますます呼ばれた理由がわからない。それに窓枠にいる兄ちゃんは何者だ？

「藤村くん、何で自分がここにいるかわからないって顔してるね」

「はい……」

「賢そうな松谷くんは、ここに入ったら何となく理由はわかったみたいだよ？」

「そうなの？」

「まあ、何となくですが……」

審査員の真ん中に座るおそらくプロデューサーの人は、書類に一度目を通すと俺達を向き言った。

「おめでとう。君たちはオーディション合格だ」

こうして俺は夢へまた一步近づいたのだった。

誕生 前編 (後書き)

いかかでしたか？まだ誕生編は中途半端ですので、近いうちに更新したいと思います。

窓枠の兄ちゃんもしっかり出ていきますので(笑)

## 誕生 後編

ほうほう、オーディション合格ですか。不合格よりはそりゃ合格の方が嬉しいですとも……

「じっ…合格ですか!？」

合格を宣言されること約1分。俺はやつと反応することが出来た。

「そう、合格だよ」

ニコニコとしている審査員。

隣の男前 松谷くんも部屋に入るなり理由も感づいたらしいが、審査員の口から合格といわれるとやはり驚いていた。

「君たちをここに呼んでの合格発表となつたのは、まず君たちはバンドを組んでの参加ではなかったからなんだ」

真ん中の人はやっぱりプロデューサーでその人の話によると、今回はバンドグループを売り出すのが前提だからもちろん合格基準の中にバンドである事があつただけ、俺の歌声に松谷くんのギターそして窓枠の兄ちゃんのベースが組めば、今日集まったどのバンドにも勝るということで別途呼び出しという形での合格発表だったらしい。

「あの場での発表じゃあバンドを組んでないのになんでって混乱になりかねないからね。だから他の参加者には申し訳ないけど、きち

んと説明して帰ってもらったよ。大丈夫だよ、志水くん」

「はい、そこは滞りなく済ませておきました」

「さすがに仕事が早いね」

「恐れ入ります」

スーツの人の受け答えはいたって丁寧だ。

「では三人には親睦会も含めて早速曲作りに入ってもらおうよ。事務所にカンヅメで」

「「!!!?!」」

プロデューサーはそういうなり、ドアに向かって合図をした。するとドアからは怖い顔した図体のデカイお兄さん達が入ってくる。反抗出来る事もなく、俺達は彼らに引きずられるようにして連行されるのだった。

…

この部屋に連れて来られて30分、初対面の俺達には会話もなく壁にかけられた時計が秒を刻む音だけが響いていた。

幼い頃時から“落ち着きのない元気な子”と周りに言われてた俺は、沈黙に耐えられずとりあえずギターを取り出しポロンと弾いてみた。さすがに今さつき出会ったばかりでしかもこの三人しかいない状況で俺の下手なギターを披露するのも気がひけたが、沈黙しているよりはマシかと俺は有名な曲の一節を弾いてみる。

見上げた空は澄んでいて

弾きだしたもののやっぱり俺のギターじゃ面白くない。ギターを持ったままアカペラで歌っていると、控室で聞いた心に響いたあのギターが伴奏に入ってくる。

歌いながら二人を見ると男前がギターを弾いていた。

『あのギターは男前だったんだ…』

ギターを弾く様も男前だなあとか思ったけど、あのギターと一緒に歌えるのが何より心地よかった。

「ふうん…」

だんまりだった兄ちゃんも一言呟くとベースを取り出し、俺達に加わった。アカペラからギター伴奏が加わりベースの低音が加わると、歌ってる俺も気持ち良くなりいつの間にかいつもカラオケとかで歌ってるように大声で歌っていた。

俺達は初対面でお互いの名前すら知らなかったが一曲合わせる事で互いの力と、これから長い付き合いになるであろうことを音で感じていた。

…

「……………っていうのが俺達の結成のいきさつなんですよ〜」

華やかに着飾った司会者に豪華な顔ぶれ、常に笑顔を絶やさない。スポットライトを浴びて今日もTVスター屋さんをやっている。あれから5年の月日が過ぎ、4年間の準備期間を経て今年でデビュー2年目になった。

俺の左側には葉瑠が右側には久美ちゃんがいる。あの時出会った二人とは今も肩を並べ夢にむかって走り続けていた。

カンヅメにされてからしばらくはお互いの力量を計るかのように歌い続け、プロデューサーに怒られるまで曲作りの事は忘れていて、それどころか後からデビューする予定だった後輩グループに先を越され、結成から随分遅いスタートとなった。

「でも最初、オーディションの控室でふじっここの下手なギターを聞いた時は驚きましたよ。」

「このギターでよくオーディション受けたな」って

会場内に小さな笑いがおこる。

葉瑠は俺の事を“ふじっこ”と呼び、あの頃と同じように顔をくちやつとさせて笑う。

「いやいや、それをいうならお前の歌だって相当ヤバかったって」

葉瑠の歌の下手さは周知の事で、今じゃこうやって笑いのネタに使わせてもらう。

お客さんの中のファンの子だろうか、歌は下手でもかっこいいよ！という叫びが聞こえ、葉瑠は

「わし、やっぱりミュージシャン向きじゃなかったですかね」

とお客さんに向かってウィンクしてみせる。

司会者も葉瑠くんはアイドル向きかなつと笑つと笑う。

「こいつらその話をさせるときりがないですよ？だから俺のベースでこいつらをまとめてやらなきゃって思った訳ですよ」

ハッハッハと笑う久美ちゃんは、結局いつもおいしい所だけを持って行く。

オーディションの時窓枠にいた兄ちゃんこと、まきのひさみ槇野久美は最初は謎の兄ちゃんだったが話をしてみるとなかなかの強者な事が判明し、今や葉瑠や俺のよい兄貴分で二人とも“くみちゃん”や“くみ”と呼ぶ。

俺と葉瑠が久美ちゃんの嘘でもない発言に返す言葉もなく黙ると、また会場ないを笑いが包んだ。  
俺達はミュージシャンであるけど、こういったファンの人や他の有名名人との掛け合いを大事にしている。

デビュー2年目、俺達の夢はまだ始まったばかり。楽しい事もたくさんあるだろうし、壁にもぶちあたるだろう。でもこの三人なら乗り越えられる気がする。 スポットライトの中で確かに確信していた。

## 誕生 後編 (後書き)

誕生編はこれで終わりです。これから色々と壁にぶちあたって行く予定です！次話も読んでいただけると嬉しいですよ。

## 志水通信 (前書き)

こちらはコメディータッチの強い(つもりの)短編になります。今回はオーディション後の彼らをマネージャー視点でお送りします。

(追記)

20日22:30

頃内容を一部修正しました。

## 志水通信

窓から見る空はあんなに晴れているのに、広くはない部屋に男4人でカンヅメています。

僕は志水といまして、今“PRISON MANSION”というバンドのマネージャーをしています。

タレントたるもの晴れた日は外でプロモーションの撮影やらするもので部屋に閉じ籠ることもないはずですが、僕の担当する彼らは事情がありましてかれこれ1ヶ月程この状態です。

「あゝっ書けん！詞が書けーっーんっ」

そんな雄叫びと共に机に突っ伏したのはヴォーカルの藤村聖さんです。

歌詞が書けない苛立ちから掻きむしってぐちゃぐちゃになってしまいました。明るい茶色で流行りの髪型の好青年。といえば聖さんの見てくれは表現できるでしょう。男の人ですがぱっちりとした目が特徴的です。

本人はご自分の容姿を“中のそこそこ”といっていますが、僕はその辺の方々より断然いい分類にはいるかと思えます。

「ふじっこお〜」

一生懸命詞を書こうとしている聖さんにちょっかいをかけようとしているのが、ギターの松谷葉瑠さんです。葉瑠さんも詞を書いていましたが、作業は終わったようです。しかし…

「…」

「なあなあ、ふじっこ」

「……」

「…ふじっこ、愛してる。だからこつち向いて？」

「…死ね」

ご自分が暇なのをいいことに、真面目に仕事してる聖さんの邪魔ばかりします。邪魔して怒られて落ち込むのは葉瑠さんなのに、（失礼ですが）学習能力がないようでこの1ヶ月この様な光景を何度か見えています。

「けん、ふじっこがわしをいじめる」

葉瑠さんは生粋の都民なのにご自分を“わし”と呼びます。黙っていれば老若男女誰が見てもかっこいいという程の男前だというのに、口を開くとみなさんががっかりするほどのおバカっぷりを発揮します。

ちなみに“けん”というのは僕の事です。本名は“けん”ではなく“恵輔<sup>けいすけ</sup>”なのですが、どこから“けん”が出てきたのかさっぱりわかりません。葉瑠さんは人のあだ名を考えることが好きみたいで、“ふじっこ”や“けん”も彼がつけました。

「葉瑠さん、聖さんの邪魔ばかりしてはダメですよ。聖さんには聖さんの仕事をきっちりしてもらわなきゃいけませんから」

「えー、じゃあわしはどうしたらいいの？」

「じゃあ、いつかやるライブに向けて踊りの練習しとけ」

この声はベース担当の槇野久美さんですね。彼は強者ですよ。

「わしが踊ればジョニーさんもびっくりするか？」

「おー、お前ならスカウトされるかもね」

「くみちゃん、わし頑張る。ワイヤーに吊られたって踊ってみせる」

ちよつと葉瑠さん、あなたはジョニーさんにスカウトされちゃダメですって。

ちなみにジョニーさんとは生粋の日本人でジョニーはあだ名。アイドル専門のスカウトさんで、ジョニーさんにスカウトされたら某アイドル事務所のMでのデビューが約束されてるとか。

話が少しそれましたが、久美さん（葉瑠さんがつけて下さったのでくみさんとよんでいます）は黙っているところを見ると怖そうなお兄さんに見えます。

でもそれはちよつと無愛想でただ単に喋るのも面倒くさくて黙っているだけで、実際は怖い方ではありません。

飄々としていて気分屋で暇している葉瑠さんをこうやってからかったあげく中途半端なところでほったらかし、ご自分は何喰わぬ顔でベースを弾きます。ある意味このバンドの中では問題児ですね。

彼らは1ヶ月前のオーディションに個人的に受けにきていましたが、プロデューサーの案で三人がバンドを組むことになりました。僕もこの三人ならすごいことをやってくれそうな気がしますが、若干ス

ターゲットが遅いのが心配です。

最初の音合わせとかを、一週間近くやってようやく曲作りに入りはじめたばかり。プロデューサーは早くデビューさせつつもりだったようですが曲がなければ詞もまだ出来てないのがあり、この調子だとデビューはまだまた先のようです。

「…ジャン どう？くみちゃんこんなダンスは」

「…お前の歌ではダメだな。ああ、ジヨニーさんも遠ざかった…」

「…わしの歌とジヨニーさんは関係ないじゃん」

「………お前らうるさい」

そんな三人を僕は影となりあるときは盾となり見守り続けようと思います。

しかしこの調子はいつまで続くのでしょうか？僕も早くお日様の光を浴びたいです…。

志水通信 (後書き)

ぬるいというか、コメディーっぽくないですね(汗)  
読んでいただき、ありがとうございます！

“TVスター屋さん”はシリアス中心の本編とコメディー中心の番外編を織り混ぜて連載しようと思います。予定ではたくさん濃くい登場人物出てきますので、そちらも楽しみにしていただければと思います

## 立ち向かう勇氣1（前書き）

こちらは本編の続きになります。

「誕生編」で少し話にふれた、“先にデビューした後輩”が出てきます。

## 立ち向かう勇氣1

某テレビ局の廊下で次の歌番組の収録をするスタジオに向かって聖と久美は歩いていった。

国民的歌番組に出演するのは久しぶりで、この番組には有名どころも多数出演する。彼ら“PRISON MANSION”はまだまだ新人に近いポジションで少々居心地の悪さはあるものの、こうやって大物に混ざれることを喜んでいた。

大物ミュージシャンとトークが出来るかもしれないチャンスだったが、葉瑠は体調不良のためやむを得ず曲収録ギリギリまで楽屋待機となつている為には2人だけ収録に向かつているところなのだ。

「やっぱりダメだったな。葉瑠、あんなに楽しみにしてたのに…」

「「よっしゃ〜！今回緒方さんも出る」ってすごいはいしゃいでたもんな…」

“緒方さん”とは男性シンガーソングライターで、ギターを片手に歌うスタイルから葉瑠の憧れであった。

「あいつ、緒方さんとは共演したことあるのにまともに会話したことないんだってさ。俺も何回か話せるようにしてやっても「わたしは眩しくて話せん」なんて言っつて自分よりちっさい俺の背中に隠れんの」

「ははっ、恋する乙女葉瑠ちゃんだな」

そんなほのぼのとした会話をしていると、

ドン！

角を曲がってきた人にぶつかってしまった。

「あつ、すみません」

「……イエ、こちらこそ」

「あつ、聖さんに久美さんじゃないですか！おはようございます」  
ぶつかった相手は事務所の後輩の4人グループだった。

後輩グループといっても事務所に入ったのが聖達のあとであっただけで、実際デビューは彼らの方が早かった。正直聖達は自分達の方が後輩ではないかと思っているが、彼らは年下であることや事務所から言われてることもあり“一応”聖達を先輩としてみている。

「おはようございます、こっちの不注意ですみません…」

メイクも終わっていたので、聖は慌てて相手の衣装をみる。自分のファンデーションがついてないのを確認すると、安心のため息をつく。

どちらが先輩かはつきりしない立場なので、聖は敬語を使うようにしていた。

「いえ、気にしないでください。今日はご一緒出来るみたいで、俺達も楽しみにしてたんです」

グループのリーダー格である智尋が襟元を正しながら言う。

「僕達こそ。同じ事務所の人がいると心強いです」

「あれ？今日は葉瑠さんはいないんですか？」

「ああ、葉瑠は今日体調不良で曲の収録ギリギリまで待機なんです」

聖はにつこり笑いながらいうが、智尋や他のメンバーは見下すようにクスクスと笑っている。下を向いた聖とは反対に、たまたま彼らの表情を見てしまった久美は少しだけ眉を寄せた。そんな久美の反応に気付かない彼らは、

「それでは……」

という挨拶と、本当に小さな声で

「チツ、ファンデーション付いたらどうすんだよ」

「一応俺達の方が世間的には“先輩”なのにな」

「あいつ、体調不良だって。ジコカンリがなってないんじゃないかねえ？」

と暴言を吐いていく。彼らは聞こえないように言っただつもりだったのだろうが、偶然にも久美には聞こえてしまった。

「前を見なきゃいかんかったな……」

そう言われているとは気付かず、智尋の心配をする聖。久美は聖の肩をぼんぼんと叩いてやる。

「くみちゃん？どうかした？」

「なんでもない。今日は頑張ろうや」

久美は彼らの態度が少し不愉快に感じられたがここで揉める訳にも  
いかなかったため、今あったことは胸の内にとまっておくことにした。

## 立ち向かう勇氣1（後書き）

まだ話は途中ですので、早めに更新できればと思います。

## 立ち向かう勇氣2

“PRISON MANSION”と智尋達“LUCKS”は同じ事務所でありながら、実は経歴上での間柄がよくなかった。

オーディションに受かり聖達PRISON MANSIONが先に事務所契約を果たしたが準備期間が予想以上に必要で、デビューするまでの間に智尋達LUCKSが事務所契約をし先にデビューしてしまったこともあるが、実は彼らは聖達と同じオーディションにバンドとして参加をしていたのだ。

当時プロデューサーは聖達を合格にする時に他のバンドから“なぜバンドグループをデビューさせるのにバンドを組んでない彼らを合格にするのか”と苦情が出ないか心配していたが、やはり智尋達は納得出来ずにいた。

オーディション後ライブハウスでスカウトされデビューが決まったLUCKSだが、事務所を訪れた智尋達はまだ準備をしている聖達を見て、

『やはり自分達の方が実力があるじゃないか』

と思うようになったのだ。それ以来LUCKSは聖達に対して表面上は先輩として接しているが、裏では偉そうにし聖達を見下していた。

：

「元実力派バンド、1年ぶりのシングルはチャート入りせず」か

…」

楽屋で待機していた葉瑠が偶然手に取った週刊誌に書かれていた記事は、自分事でもなくともやはりいい気はしない。

話題にされているのが、同じ事務所の彼らだと思つと益々だ。

葉瑠達のデビューが遅かったのは曲作りに取りかかるのに時間がかかったのもあるが、曲が出来てもデビュー曲として満足が出来ず何度も調整を重ねていたのだ。

『デビュー曲として世に送り出すなら、自分達が納得出来るものを』  
彼らなりのプロとしての自覚だった。

一方、聖達より早くデビューを果たしたLUCKSは、実力もあつたため自らが作詞作曲したシングルはチャート入りし瞬く間にトップのぼりつめた。

が、たまたまニューシングルの発売が大物アーティスト何組かと重なり、思うように売れなかったLUCKSは芸能界入りして初めて敗北に似た感情を味わう。

それからというもののシングルが売れなのではないかという不安や、ルックスも良かった為にミュージシャンとしてではなくタレントとして活躍もしていたという事もあり、自らの持ち味だった自分達による曲作りをやらなくなってしまった。

最初はゴーストライターを使つたりしていたが、インディーズから彼らを知っているファンにはLUCKS自身の曲ではないことがわかるため、ファンの支持も薄くなつてしまい今に至る。

…

「…LUCKSとPRISON MANSONのみなさんは事務所が同じで歳も近いということですが、お互い普段は仲がいいんですか？」

歌番組本番を収録中、トークのコーナーでは司会者からの定番の質問。

聖の右側に久美が、左側には智尋が座っている。

「ええ、事務所に入ったのは僕達が後なんですけど、聖さん達には良くしてもらってます」

「芸歴を見るとそうですね。今日は葉瑠さんは歌のみの出演と聞いていますが、お2人はLUCKSの皆さんとは？」

「僕達は曲作りに時間がかかりすぎてしまって、正直あまり会う機会がないんですよ。僕より久美が良く彼らと会うみたいで…」

聖はその芸歴だとか事務所に入ったタイミングの話はLUCKSの前ではして欲しくなかった。聖も久美も葉瑠もその話題はお互いのバンドの関係を悪くするかもしれないと危惧していたからだ。

「そうですね、良くぼくっとながら煙草を吸っていると廊下でばったり出くわすことがあります」

「聖さんたちが事務所にいるときって、ほとんど引き込もってばかりですもんね」

「僕達嫌われちゃってるかなって思うくらい、実は会うこと事態す

「くなくたり」

やはり話の雲行きが怪しくなってしまうた。智尋の話す横でクスクス笑う声は、明らかに聖達を侮辱している。先程の廊下での出来事に気付かなかった聖も、さすがにこの場の雰囲気が悪いことに気付いた。

「ぼ…僕達はまだまだ勉強不足ですからね…」

「その割りには今日も葉瑠さんは歌だけって、勉強する気もないんじゃないです？」

「あの人はジャニさんにもスカウトされるんじゃないかっていわれる位だし、ステージに立つてれば大丈夫じゃないですか」

その発言に久美は顔をしかめた。言った本人は笑っている。

自己管理の不十分さは認めるがメンバーを侮辱され聖も見えない位置で拳を握り、怒りで震わせていた。

「なあ、キミらそれは言い過ぎとちゃうか？」

そこへ助け船を出してくれたのは演歌界の大御所の綿矢だった。彼女は関西弁を話し、マナーやルールにはうるさいことで有名だった。

「私も松谷は体調不良って話は聞いたけど、確かに自己管理をしない松谷は悪い。でも仮にも事務所の先輩に向かってその言い方はあんまりやな」

綿矢は彼らの会話から触れてはいけない話題だと気付いたのか、気

をつかつて葉瑠の事を“事務所の先輩”と表現してくれた。  
さすがに綿矢には反論出来ず、智尋達は黙り込む。

このまま沈黙が続くと対応に困まると心配していた司会者にカンペ  
が出される。

「えっと、PRISON MANSIONの葉瑠さんですが急遽こち  
らにみえたとのことです」

「こんばんは、PRISON MANSIONの葉瑠です。途中から  
失礼します」

司会者の紹介とともに頭をペコリと下げ、葉瑠が久美の横へ座る。  
その額にはうつすらと汗が浮いており、顔色もあまりよくなかった。

「そういえば今日みえる綿矢さんにも前に言われちゃいましたよね。

「あなたは少しは歌を上手くしないと子どもが出来たら大変やで  
って。僕、本当に歌うの苦手なんですよね」

「ホンマ、コイツの歌を子守唄にしたらその子はギターしか弾けん  
子になるわ」

「葉瑠の子が音楽をやるとは限りませんよ」

葉瑠本人の話題により場の雰囲気が悪さが少し減り、司会者もほっ  
としていた。

智尋達は先程のように発言することもなく、ただ聖達を黙って睨ん  
でいた。その姿はテレビには映っていないものの、カメラマンを  
はじめとするスタッフには見えていたのでLUCKSは自らイメー  
ジを下げてしまった。しかしそれには気付かない。

## お詫びと報告

非常に勝手ながら、このお話をリニューアルしてまた別の作品として連載することに決めました。

理由はイメージしながら書いているうちに、書いてみたい物語の方向性が違うことに気づき一からやり直したいと思ったからです。

初めはコメディータッチな話も合わせていくつもりでしたが、やはりイメージとはちょっとちがいました。

多少の笑えるところは書こうかと思いますが、あくまでもシリアス路線で進めていこうかと思えます。話の途中でこの話の連載を辞めてしまつてすみません。

何人かの方に読んでいただきましたが、読んでくださりありがとうございます。

キャラクターの、聖、葉瑠、久美、志水はもちろん登場させ第1話はほぼ同じ文章で初めます。

新しい小説の題名は

「LIVE」でやろうと思つてますので、よろしければ読んで下さい。

## 予告

藤村聖は昔父親に連れられて偶然行った有名な海外のアーティストのライブで、幼心に衝撃を受けた。

密室に閉じ込められた人の熱気で蒸せ返った会場内、スポットライトに照らされたステージ、そしてその真ん中でそのアーティストは

声を張り上げギターをかき鳴らしている。そのサウンドは聖の心の奥底に響き、成長した今もなお胸を焦がせていた。

そして彼に

「胸に響くような音楽を作り出すミュージシャンになる」という夢を与えた。

デビューまでいくつもの困難にぶち当たるが、仲間の支えと夢の為に聖は走り続ける事を辞めなかった。

いつかは自分もステージに立てることを信じて…

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9920b/>

---

TVスター屋さん

2010年10月10日18時21分発行